

寒椿

衰えていく体力に老年の衰れを感じ、時の流れをしみじみ想うこの頃である。

過ぎし歲月の中、二人の兄はあの世へ旅立ち、戦地より生きては帰れないと諦めていた私は八十八歳となり、子供たちから祝福を受けた。

写真・玉突き・囲碁・その他いろいろとやって来たが、プロに近い技は何一つない。強いて言えばカルメラ焼ぐらいだろう。

小学校の低学年の頃、父に連れられ博多の街で、有料でカルメラ焼の特訓を受けた。はっきりとは覚えてないが、二日間ほどかかったと思う。

当時私の家はなんでも屋みたいな、小さな店をやっていた。

砂糖一斤で何個焼けるか、生活がかかっているので失敗は許されなかった。真剣勝負である。貧しかつ

たから子供心にもその自覚はあった。私の焼いたものは評判が良くすぐ売り切れた。

母の実家に行くときよくカルメラ焼をさせられた。私の焼くのを見て大人たちがやり出したが全く駄目だった。

「そんな遊び半分で作っては駄目」

と私が言うと、大人たちは驚いたような顔をした。

そんなことがあって大人たちは焼くのを止め食べるだけになった。

世間知らずのポーツとした私をいろいろと助けてくれた戦友、大部分は他界したが、生存している一人から電話があった。

「生きとったやー。よかったー。寂しくなったなー。俺も歩けんことになったばい。台湾で食べたあんたのカルメラを思い出して電話したとたい」

復員の時、門司港駅まで見送りに来て涙ぐんだ彼だった。

同駅は、国の重要文化財に指定された唯一の駅。

遠い日、拒むことのできない赤紙一枚で、愛する家族と引き裂かれた光景を、じっと見て来た語り部の駅でもある。

上の兄は他界する前、私を誘って母の里(波多津村大字筒井)を訪れて、寒椿の咲く墓の前で、長く頭を下げていた。幼い頃から母に連れられ幾度も来たいろんな思い出のある地である。

これが兄と私の最後の小さな別れの旅であった。

次の兄は昨年八月二十二日九十七歳である世へ旅立ったが七月十一日わが家へやって来た。

「またね」

つかの間見つめ合い笑顔で別れたが、目にする後ろ姿はいつもとは違い弱々しく寂しかった。

弱りつつあった体で最後の別れにやって来た兄の心情を思うと、こらえようもなく私は声を出さずに泣いた。

この兄も寒椿の咲くあの地を五月十一日訪れて

◎ひっそりと目立たぬ里の寒椿

辞世の句と思われるものを私宛に残している。

兄の生き方を示したと思われるこの句は鋭く私の胸を刺した。

男兄弟三人で旅をしたことがある。

「スッポン料理が食べたい」

と言う私の提案で佐賀の宿に向かった。

珍しいとは思ったが味は期待ほどではなかった。

農家の小母さんが打ったという蕎麦が出てきたが、これには三人共驚いた。

米が足りなくなってくると、母がよく打って食べさせて呉れた蕎麦の味に似ていたのである。手を合わ

せて頂いた。

貧乏に強い母だった。周りも皆貧しくて、そのような事は当り前のような時代、何の不満もなかった。百歳近くまで貝を掘り元気だった。

大晦日になると楽しみにしていることがある。それは、はりま釜の人が蕎麦を打ってくれるからである。わが家全員蕎麦好きである。特に食いしん坊の私は旨い蕎麦を求めて、あちこち行ったものである。池波正太郎の文に出てくる浅草の店に行ったり、松江・出雲・福岡・そして今は伊万里（一軒）である。

はりま釜の方の手打蕎麦を食べると母の味がして、母に会ったような気になるのである。

私が召集を受けた時、母は伊万里駅まで見送りに来たが、私の方を全く見なかった。懸命に涙をこらえている様子だった。大村の部隊まで私と一緒に行く父が側により、肩をそつとたたくと母は泣いた。生きて再び私と会うことはないだろうと思っただけに違いない。

大村の宿では全く酒の飲めない父と私に、銚子一本が出された。二人は顔を見合わせ盃一杯ずつ顔をしかめて飲んだ。内心、別れの盃だと思った。

貧弱な体格の私が軍隊生活に堪えられるかどうか、父はそれが気になっている様子だった。

宇品港・門司港を起点として、パラオ・マニラ・ラバウル・基隆・高雄・台北と転々とした。昭和十八年八月十六日輸送船 帝海丸に乗船。船団を組み、南支那海を南下、九月二日比島セブ島に上陸。セブ島ではガダルカナル方面で壊滅した船舶部隊の再建をしていた船舶司令部の指揮下に入った。

マニラに次ぐ第二の都市セブ市は当時治安が悪く、外出は殆んどできなかった。比国の人々との交流は

少しはあつたが深入りはなかつた。日本人は油断ができないという考えがあつたようだつた。胃腸薬、包帯、タオルなどが欲しいので寄つて来る者はいた。

高雄に転進するまでの約五ヶ月間、幾度か危険なことはあつたが、私は運よく生き延びた。カルメラ焼の道具は、妻が大切に保管していると思うので近く焼いてみたいと思つている。さして遠くない日に二人の兄と同じように、寒椿の咲くあの地へ行くつもりである。

